

## ニュージーランドの小学校で学んだこと

山口市立二島小学校 校長 辻本 紳一朗  
(平成6年度派遣 オーストラリア パース日本人学校)

派遣当時の思い出ではないのですが、令和元年7月の終わりから8月の初めにかけて、オーストラリアの隣国ニュージーランドの教育視察研修に参加してきました。その際に学んだことを少し記させていただきます。



### 1. 子ども主体の教育

今回訪れた小学校のすべてで大切にされていたことは、「子ども主体」の教育です。「子どもは一人ひとり異なる」、ということが大原則としているため、全体の達成度ではなく、それぞれの力をどれくらい伸ばせるかという視点で「その子が学ぶべきことを学ばせる」という考えが大切にされていました。

### 2. 学び方が自由

学び方も日本に比べると非常に自由で、一般的なのは先生が椅子に腰かけ、子どもたちが床に好きな恰好で座っているというスタイル。学校によっては、朝の授業中に空腹を満たすためにフルーツを食べながら授業を受けてもよいところや、異学年間の教室がつながっていて、理解度に合わせて他の学年を行き来して学ぶというところもありました。また、ある学校では、その子の学習スタイルに合わせた机や椅子が用意されていました。つまり、子どもが学びやすい環境づくりをすること、その中で個々の子どもの力を最大限に伸ばすことが大切で、全国一律に「学習はこういうスタイルでしなくてはいけない」という型が決められていないのです。柔軟な考え方に感心するとともに、教育予算が充実していることをうらやましくも思いました。



(授業を受ける子どもたち)

### 3. ウェル・ビーング

これでは、子どもたちが落ち着いて学習できないだろう、と思ってしまうのですが、学校教育では” Wellbeing” という「精神と健康」について総合的に学び「精神的な体力を培う」ことが大切にされています。また、” Behavior” という「学校でふさわしくない言動はしない」という行動学習もあり、自由なように見えて、子どもたちが学びに向かう力はしっかり育っている気がしました。

### 4. 食べる食べる

朝の授業中のフルーツタイム以外に、中間休みにモーニングティーというものがあり、家から持ってきたフルーツやお菓子を食べる時間がありました。アレルギー対応でピー

ナッツはNGという学校もありましたが、基本的に何を持ってきて大丈夫でした。ランチタイムでは、さらに家から持ってきたお弁当を食べます。日本に体験入学した子が「日本の学校は本当にお腹が空く」と言っていました。ちなみに、お弁当を持って来られない子には事務室を通して食べる物を注文できるシステムがありました。また、家庭事情でその日にお弁当を持参することが難しかった子には、簡単な軽食が用意されていました。「自由」の考え方が日本と異なるのですね。



(おやつを食べる子どもたち)

## 5. 学校中のアート

教室内も廊下も体育館の壁も子どもたちの造形作品がたくさん飾られていました。これはアメリカやオーストラリアの小学校も同様でした。図工の授業にかなり力を入れているのかな、と思いましたが、そもそも図画工作、という授業はないそうです。造形表現は様々な表現活動の中で特に大切にされており、すべての教育活動と「造形活動」というものが自然に結び付いているのです。



(アートだらけの教室)

学校中がアートだらけで、子どもたちはそこにある様々な色と形を自然な形で鑑賞しながら、豊かな感性を培っているんだなあ、と思いつつ、授業を受けている子どもたちが情報満載の教室の中で集中できていることには感心しました。



(図工室の備品や消耗品)

表現活動を重視しているだけあって、図工室には授業に必要な備品や消耗品がかなり充実しており、きちんと管理されていました。

## 6. 宿題がない

それぞれの学校で「宿題はありません」、という話を聞き、びっくりしました。なぜですか、と尋ねると、「子どもは帰宅後に、学校で学べないことを学ぶ」ためだそうです。お手伝いや地域社会との関わり、スポーツクラブや外遊び、兄弟や地区の友達との関わりなどを大切にしているのです。



(図書室前で並ぶ子どもたち)

その中でも「家庭読書」は大事にされていました。学校では読書の時間が確保できないからです。学校の図書館前には、本を借りる子の列ができていました。

## 7. 入学式がない

ニュージーランドでは、5歳の誕生日に入学する制度があるため、子どもたちはいろ

んな時期に入学してきます。ですから、入学式というものは存在しません。一斉に教えるべき学習内容が気になりますが、習熟度によって学習内容が異なるシステムがあるため、それぞれのもっている力に合わせた学習を進めることができるのです。

これは、上学年も同じです。同じ学年の中にそれぞれの学習の習熟度クラスがあり、学年を越えた学びが保障されています。付け加えると、小学校では基本的に教科書を使わないため、この学年ではこの教科書の内容を理解しなくてはいけない、この問題をすべて解かなくてはいけない、といったことがないのです。

各教室はつながっており、子どもたちが自分の習熟度に応じて教室を行き来している姿が印象的でした。



(異学年が一緒に学ぶ教室)

## 8. 社会に出るまでに必要な力

教科書がない、ということは、それぞれの教師が学習内容を考える必要があるということです。しかし大事にされているのは、「学校は、子どもたちが社会人になるためのスキルを身に付ける場所」「教室を通して社会を良くしていく」という考え方です。つまり「何のために学ぶのか」という視点で目の前の子どもたちにとって必要な学習内容を考え、いろいろな学び方は存在しても、ゴールまでの道筋はぶれないようにしているのです。

ニュージーランドの教育省が提示している「身に付けるべき能力」は、「考察」「言語・記号・テキストの活用」「自己管理」「他者との関係」「参加と貢献」。また、その中で必要とされることとして、「積極性」「他者との関係性の構築」「社会に貢献すること」「生涯にわたり学び続けること」が挙げられています。それぞれの授業は教師に委ねられても、目指す方向性は共通のものとなっているのです。



(教室に置いて帰る教材)

## 9. 学習用具は持ち帰らない

教科書はもちろんですが、ノートやワークシートなども家に持って帰りません。日本のように頑丈なランドセルは必要でないため、子どもたちは軽いリュックサックの中に筆箱とお弁当、おやつ、水筒などを入れて通学しています。このリュックを教室の外に無造作にかけているのには、ちょっとびっくりしました。治安がいいのでしょうか。



(廊下に並ぶリュック)

## 10. 活動に合わせたフィールド

校庭は芝生です。これは安全に子どもたちが活動をするためです。校庭には遊具がありますが、その下には細かく砕いた木チップが敷き詰められています。子どもたちが転落しても大きなけがをしないように、ということです。ボール遊びや体育の授業では、その活動内容に応じた地面が必要となるため、人工芝やアスファルトが準備されていました。これらは以前訪問したアメリカやオーストラリアの小学校でも同じでした。



(運動場の遊具)

## 11. 教師に求められること

ある小学校の校長先生が、「ニュージーランドの学校の教師に求められること」として次のことを話されました。「子どもが安全であること」「子どもの心が安全であること」「子どものことを知っていること」。これは日本の学校でも同じです。

ところで、ニュージーランドの先生たちは授業づくりや研修のためのミーティングに多くの時間を使っています。教科書がないため、教育省や各校が求めるゴールまでの道筋に沿うような授業づくりをする必要があるためです。これが子どもたちの学力の高さにつながっているような気がします。日本の教師からすると、忙しい毎日の中で、どうしてもそんなに研修に時間を費やすことができるのか、と思ってしまうのですが、ニュージーランドの教師には給食指導も清掃指導も宿題の添削もないことに加え、家庭連絡や集金業務などの事務関係一切を多くの事務スタッフが行っていることが関係しているようです。



(事務スタッフのデスク)

## 12. 校服

それぞれの学校にそれぞれのユニフォームがありました。ポロシャツ・トレーナー・ウインドブレーカー・フリースなど、扱いやすく子どもたちの活動に合ったものでした。

## 13. Board of trustee

学校の管理委員会的な役割をもつ組織です。ここには校長・教職員代表・保護者・保護者から選ばれた地域住民の代表者が所属します。この組織は学校運営全般に関わり、人事に対する意見や校長を採用する権限ももっています。同時に、子どもたちの安全を守ることや、教育予算を確保するという業務も担っています。予算確保の方法として、寄付金集め



(教育省)

やバザー開催、放課後の託児などを行っていました。

学校教育に対する正しい評価を得ることが必要であるため、学校からは積極的な情報発信を行っていました。今回訪れた全ての小学校のホームページがとても充実しているのにもびっくりしました。

#### 14. マオリ文化の尊重

ニュージーランドには74%のヨーロッパ系、15%のマオリ系、12%のアジア系、7%のパシフィック系の人たちが住んでいます（※混血などによる複数回答を含む）。ですから、小学校でもいろいろな民族の子たちが一緒に生活しています。そもそも「違うのが当たり前」なので、こう考えると、習熟度別の学習も納得です。

こうした中で、印象的だったのは、全ての学校でマオリ語やマオリ文化を必修内容として学んでいることです。マオリの精神は、道徳教育としても取り上げられていました。これは、1840年に締結されたワイタング条約が生きているためです。これは当時の英国の君主と先住民マオリとの間の条約で、ニュージーランドが英国領となっても、マオリが有する土地や文化の継承は約束するというものです。この条約を国が遵守するため、国の教育機関である小学校でもこれが大切にされているのです。私たちが訪問した学校ではお迎えに子どもたちがマオリ語の歌を歌ってくれましたし、ある学校では先生たちとの挨拶もマオリ式（鼻と鼻をくっつけるあいさつ）でした。



（マオリの子どもたちによる歓迎のダンス）

ちなみに、ニュージーランドでは国家の1番を英語、2番をマオリ語で歌うことになっています。ラグビーチームが試合前に「ハカ」というマオリのダンスを踊るのにも、そうした背景があるのですね。

#### 15. おわりに

一昨年に「多文化共生フォーラム」というイベントに参加しました。パネルディスカッションで、県内在住の外国人の方々が山口の印象を語っていました。話を聞きながら、「なるほど、そんな風に外国人は山口のことを見ているのか」と感心することがたくさんありました。

このニュージーランド研修で学んだことも、日本の教師である私が「日本の教育」というものさしをもって見つめたからこそ学び得たことかもしれません。

この研修は、世界にはまだまだいろんな「当たり前」があることに気づくと共に、日本の教育のあり方について立ち止まって考える貴重な機会となりました。同時にこれからのグローバル社会を生きる子どもたちに育てるべきアイデンティティや、より幅広い視野で客観性をもって物事を判断する力や思考力、多様な価値観を育てていく必要を改めて感じました。